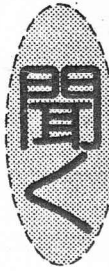


この人へ



内戦で流出したルワンダ難民を救うため、「アジア医師連絡協議会」(AMDA、菅波茂代表)などでつくる、非政府組織(NGO)「ルワンダ難民救援グループ」代表の原田豊己さん(40)岡山カトリック教会が、十七日まで八日間、隣国ザイールのゴマ、ブカブなどを視察して、帰国した。現地の医療活動などについて聞いた。

湖南岸のブカブ地区カレヘキャンプに、新たに医療センターを設置しました。初めて国連と契約した業務ですが、二十四時間体制で百人の入院患者を受け入れられます。現地スタッフも五十人雇い、栄養失調の子どもにミルクを配ったり、妊娠検査を含めた妊婦の出産を手伝ったりしています。

「治安は、どうなのでしょうが。」

「ゴマ市内では難民同士、または豊かな難民と貧しいザイル兵の間に経済格差が広がる恐れが大きいですね。コレラが沈静化した後、難

原田 豊己さん

ルワンダ難民救援グループ

民キャンプの待遇に不満が出る心配もあります」

「どんな安全対策をとっているのですか。」

「国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)がNGOと定期的に会合を開き、

リポートに発砲など異常事態の状況や地図を記して報告します。多いときは百人以上が出席し、貴重な情報交換の場になります」

「自衛隊の活動ぶりは。」

「ゴマ市の国立ゴマ病院に運び込まれた重傷者の手術などをしています。イスラエル軍の業務を引き継いだ形ですが、医官のひとりには、四日間で三回手術をしたと話しています」

ザイルの医療活動は



はらだ・とよきさん 山口県岩国市生まれ。明治大を卒業後、1982年、上智大学院修士課程を修了。広島教会勤務を経て86年からローマ・ウルバノ大学に留学。91年、岡山カトリック教会赴任。現在、ノートルダム清心女子大学文学部助教授。

100人の患者受け入れ

「現地を見て一番つかったことは何ですか。」

「ブカブ市内のカトリック教会に住みついた難民がたくさんいます。なぜキャンプに戻らないのか、と聞く。「だれも信じられないから」と答えられました。内戦が人間不信を生む現状に衝撃を受けました」

「難民救援にNGOが活躍できる利点は。」

「難民に一番助けが必要なとき、一番早く難民と顔をあわせて連帯できることです。もちろん危険も負わらうが、それを超える厚い心情が、相手に希望を与えるのだと思います」

「救援グループは来年七月ごろまで活動を予定している。募金は郵便振替口座「ルワンダ救済基金」、口座番号は0120002150021。」

(聞き手・津川章久)

危険を超える厚い心情が、相手に希望を与える